

出会い

106J088 成田 義樹

私にとって本とは何だろう。そう考えて部屋を眺めていると、様々な本が目に入ってくる。古典作品があれば現代のエッセイもある、近代作家もいるし宗教哲学の本もある。部屋を眺めてみるだけでも、自分が多くの本に囲まれて生活をしていることがわかる。ためしに鞆の中を覗いてみたら、三冊の単行本が入っていた。通学中に読もうと思って入れておいたものだ。片道四十分の電車の中、三冊もの本をどうやって読む気だったのだろうかと思うと、我ながら呆れてしまう。それでも私はまた大量の本を抱えながら、学校に通うのだろう。私にとって本とはそういうものだ。本には思わず声を出して笑ってしまうものがある。頭を殴られたような衝撃を受けるものがある。誰かに伝えたくなるほど感動するものがある。本を開くたび、ページをめくるたびに多くの《出会い》が待っている。たとえ同じ本でも、読むたびに新鮮な《出会い》がある。落ち込んだときに読んだり、新しい知識を得た後に読んだりすると同じ本だったはずなのに、その本は違った表情をしている。本はいつでも私と何かを出会わせてくれる。

そして、そんな本と私の《出会い》の場をつくってくれているのが、図書館だった。

今、私は図書館で働く人、つまり図書館司書の資格を取るための授業を受けている。その授業の中で忘れられない言葉があった。それは、「司書の仕事とは本と人をつなぐ懸け橋になることです。」というものだ。この言葉を聞いたとき、司書の仕事はなんてやりがいのある仕事なんだと本気で思った。そして、司書が本と人をつなぐ懸け橋であると同時に、図書館というものの自体も本と人をつなぐ懸け橋なのだと思う。それを言い換えるとやはり《出会い》になるのではないか。図書館には四年間あっても読みきれないほどの本が置いてある。だからこそ、図書館や司書という懸け橋を通してつながった、本との《出会い》ひとつひとつを大切にしていってほしい。

(日本文化学科 3年)